

丹波新地域ビジョン検討委員会「自立・次代分科会」 記録

1 開催日時 令和3年3月19日（金） 18:00～20:00

2 場 所 柏原総合庁舎 柏原職員福利センター 1階会議室

3 出席者

委員（五十音順）

安達委員、角野委員、岸委員、清水（徳）委員、鈴木委員、  
竹見委員、谷水委員、

※欠席委員：土性委員

事務局

丹波県民局：柳瀬県民交流室次長、西原班長、竹村

4 内 容

(1) 開会

・柳瀬次長あいさつ

(2) 報告事項

・スケジュールと方向性

協議事項

・リーダー決定→自薦他薦なし。事務局から角野委員へお願いし、リーダー就任承諾

・意見書を元に意見交換

5 意 見

<自立>

[委員]

「県民の意識・ニーズ」から順に、皆様のご意見を頂きたいが、どうか。

[委員]

「県民の意識・ニーズ」のところがネガティブなイメージが多く見られる。ビジョンは明るいものを出していかななくてはいけない中、厳しい表現が多く気になった。

30年後の目指すべき姿というところでは、丹波の森協会においても30年後の姿をつくっているし、丹波市においても丹波市のまちづくりビジョンをつくっている。そのあたりのエッセンスの部分を入れていくべき。そこが整理できないまま議論になっている部分もある。

〔事務局〕

丹波篠山市、丹波市のビジョンや総合計画とのすり合わせも行っていく必要がある。検討委員会の場とは別に機会を設けたいと思っている。

〔委員〕

一度、前回のビジョンを見ていただきたいが、5つの柱がある。その5つの柱を参考にしながら、どういう方向で30年後の姿を目指すべきか、またそのために何をすればよいかの提案が、事務局の資料にまとまっている。

とりあえず、今の枠組みの中で自由に議論していただき、必要であれば中身を組み替えるという認識を持ったうえで、再度ご意見を頂きたい。

〔委員〕

10年前の丹波のビジョンも大事だが、県が出している将来構想試案を見ながら丹波に当てはまる部分を拾っていくのも大事と考える。

農村地域は課題先進地域。ソーシャルビジネスの先進地域になれる可能性がある。

AI や自動化が進む中で、人は何をできるようになるのか。手作業や体験などを争ってし出すかもしれない。「暮らし」みたいな部分が重要視されるのではないか。この話は他の分科会の内容かもしれないが。

〔委員〕

「県民の意識・ニーズ」が暗い。この通りなのはそうだが、明るめの書き方にできないか。丹波で暮らしているということのをそれほど卑下しなくてもよい。丹波が良くて暮らしている人もいる。捉え方によっては幸せな部分もある。一見弱みに見える部分も強みに見える、というような表現を入れてもらいたい。

〔委員〕

それぞれの項目について、30年後に目指す数値があれば議論しやすいのではないかと。ある程度設定できる部分は数値目標があった方がよいのでは。

〔事務局〕

3～5年程度の中期計画については、各分野で数値目標は入れている。30年後のビジョンとなると、数値を入れられる部分もあるかもしれないが、数値はいれずに像として描くものではないか、という話を、別の分科会でも議論した。

数値目標をどのようにするかは、今後議論していきたい。

〔委員〕

地域社会が自立していくためには、従来の価値観や発想からの転換が必要。スローライフという考え方に立てば丹波は魅力のあるところ。また、公助などについて、従来のようにお金をかければできるというのではなく、支えきれない部分も出てくる。言葉を選ばずに言うと「諦める」というような発想も必要。

〔委員〕

「県民の意識・ニーズ」は、現状認識をベースとして整理すればよいのではないか。前回のビジョンでは、教育・学びのところで、地域づくりを担う存在ということが強調されていたので、今回も何らかの形で「地域づくりの担い手」という視点で話を進めていくのがよい。また2年程前に、丹波の森宣言30周年を迎え、今後の30年を見据えた「丹波のも森づくりのこれから」を議論し、とりまとめている。丹波の森協会、県、市でつくったものなので、これをベースにして、ビジョンを作るべきではないか。

〔委員〕

委員全員で、その丹波の森宣言の資料を共有するように。事務局からはその送付を依頼したい。

〔委員〕

これから人口が減っていく中で、人手が足りなくなる部分を機械やAIでどう補っていくかをイメージとして持っておくことも重要。例えば教育でいえば、科目教育をロボットが教えて、コミュニケーションの部分を人が教えているようなイメージ。

〔委員〕

自立のキーワードとしては、地域づくりの担い手や、自治・まちづくり、といったあたりになるか。自立ということばのイメージとしては、エネルギーの自立など、暮らしを構成するものを外部に頼らないというイメージが強いが。

〔委員〕

経済的な自立、という考え方もどこかに盛り込んでどうか。

〔委員〕

今回の資料の分類は、ツリー型に分類されているのではない。ところどころで重なり合っている部分がある。この課題はこの分野、というような分類はされていない。今日は自立というキーワードで考えたときに何が思い浮かぶのかを意見として出してもらい、後で事務局で整理をしてもらえればよいと考えている。

〔委員〕

自立ということばひとつをとっても、各自で考え方や定義も異なる。行政的なところで持続可能な社会を考えると、人口減の中での自立といえばデジタル化しかないだろうというのが1つある。地域の自立というと、支え合い、というところになるのではないか。それぞれの分野が、横断複合的に絡み合っている。まさしく今の社会を表す形になっていると感ずる。その中で丹波らしい、丹波ならではの、という視点があれば、深めやすいのではないか。

〔委員〕

30年後まで続く丹波らしさ、大事にすべき丹波らしさ、とはどのようなものだと皆さんは考えるか。

〔委員〕

地域のコミュニティである横のつながりと、時間軸や歴史という縦のつながりの両方が必要だと思う。ただ、今のものを守る、維持するというだけでなく、新しいスタイルに合わせていかないとしんどくなってしまう。

〔委員〕

個人事業主の事業家が多く育てばよいと考える。起業するのが当たり前で、そのような人に優しい地域にしたい。この5年間くらいでは、子育て中のママも丹波で起業して独立している人もいる。自分が働いて幸せを感じられるというところを目指したい。自己肯定感。そのような視点も入れたい。

<次代>

〔委員〕

持続可能な地域というのが大前提。

限界集落については、その特性を生かせば生き残れる。

ライフスタイルの提案にある、2拠点生活、という考え方を聞くと、丹波のような地域も捨てた物ではないと感じる。都会の働き方をしつつ、リフレッシュできる田舎がある。1拠点で何かを得るという従来の考え方ではなく、発想の転換ができればよいのではないか。

〔委員〕

SDGs の考え方は、必要不可欠のテーマ。これを、丹波だったらどう説いていくのかという視点で考える。ビジョンともリンクするスパンで考えるべきテーマである。

限界集落というのも極めて重要なテーマ。人口減に合わせて、できなくなったことの代わりをどうするか。そこをプラスの発想で考えていかなければならないので、今後議論していきたい。

〔委員〕

丹波市でも、丹波らしいローカル SDGs ということを掲げている。森林に関することなど、丹波市だからできることもある。そのような部分は入れていく必要があるのではないか。

人口は全国的に減る。そのことに向き合い、人口の構造を見つめ直す必要がある。高齢者であってもひとりひとりが役割を持って生き生きと暮らせる社会。そういう社会を作れると、人口の少ない地域であっても誰もが生き生きと暮らせるのではないか。

〔委員〕

30年後の未来を決めていくのは、40代～50代のような世代ではダメだと感じる。10代～30代の若い世代が自分たちで考えて決定していく地域にしないといけない。

子育てに関しては、「ママが」という前提はなくしてほしい。子育てはママがするものだという意識を変えなくてはいけない。

〔委員〕

丹波篠山市の場合、17ある SDGs の項目を総合計画に盛り込んでいる。市民へもそうだ

が、職員への意識づけの意味合いもある。丹波篠山らしいSDGsを考える中で、エネルギーや集落といったまちづくりの持続可能性のいうところに絞ってやっていかないといけないという認識でやっている。

集落の話でいうと、これから問題になるのは限界集落だけではない、集落の大部分が問題を抱えることになるので、項目名は「限界集落」でなく「集落」でよいのではないか。

〔委員〕

丹波地域では、第3次産業に売り上げが集中している。観光地のスポットだけではなく、そこに至る道中の景観も含めて丹波の価値。第1次産業のおかげで成り立っている。しかし第3次産業が第1次産業の恩恵の上に成り立っているということは認識されづらい。第1次産業が3次産業にどのように還元していくかという所も考えなくてはいけない。循環型社会や集落問題にも関わってくる話だと思う。

〔委員〕

丹波の田畑が太陽光パネルになることに関しては危機的に感じている。今はよいが10年後に高齢で人がいなくなったときにその所有者がいなくなり、処分の問題も出てくる。

子育てについては「子どもにとって住みやすい」という表現はもっと深く考えないとけない。限界集落のところでの「豊かな」という表現も広すぎる。

次世代の意識づくりでは、「子どもが学ぶ」という考えかたではなく、「丹波地域で暮らす大人が子どもたちに誇れる人生を歩む」という内容を盛り込んで欲しい。大人が子どもにどうこう言う前に、まず大人が地域の中で幸せに暮らしたり、自己実現できていないと、子どもに正しく教えることはできない。

〔委員〕

子どもから大人が学ぶような機会をしっかりとつくる、というのもいいかもしれない。今までは大人が子どもをリードするという形だったが、そのような時代ではなくなっているのかもしれない。

## <全体を通じて>

〔委員〕

1つは皆さんの話を聞いていて、30年後のビジョンを考えるうえでは「個の自立」を際立たせた方がよいのではないかと感じた。丹波で丹波らしく自己実現できる、それを後押しできる地域に。

もう1つ、「地域や社会の自立」を考えると議論も出てくるが、それはなくてもよいのではないか。今後、移動や関係性も流動化することで、コミュニティも変わっていく。地域や社会においては、自立というよりも支え合いのような形になるのでは。

〔委員〕

個の自立のためには、個がネットワークを持っていなければならない。その自立を支えるためのネットワーク作りを、丹波ではどうしていけばよいか。ネットワークという言葉は深く捉えていく必要がある。

また逆に言えば、個が自立していないと、ネットワークに入れてもらうことができない。自立は孤立ではないということもアピールしていきたい。

ネットワークと重なる部分でもあるが、国際化についても必要不可欠。丹波の国際化をどうするのか。今後30年において、そこが深まることは当たりまえになる。色々な切り口で国際化を議論したい。

丹波のプライドをどう育てていくか、というところも必要。

〔委員〕

作られたビジョンをどのように生かすかを議論して、そのような仕組みをつくることも必要。作られたビジョンが生かされる地域にする。どういう地域なら残り続けたいか、30年後にも帰ってきてもらえるか、という所をベースに議論していかないといけない。ビジョンの作り方も見直さないといけない。

〔委員〕

丹波篠山市で総合計画を作ったときにも同じ話が議論になったが、次に見直すときにどうするかということを書き込んでおこう、ということにした。それが、まちづくりを考えるきっかけの1つにできればよいと考えている。

自分で学ぶという姿勢が大事。自分たちで決めて自分たちでやる、ということが、自立では大事になるのでは。

〔委員〕

次代への責任、というところでは、行政も市民も役割や責務があると思う。その部分は強調して、30年後の目指すべき姿を考えていくべき。

集落や自治会など、全てが残っていくという希望は持ちたいが、減っていく現実を受け止める必要がある。そのうえでどのような仕組みが必要かを考えないといけない。個のネットワークを支える中間支援組織をつくることなども提案したい。

〔委員〕

循環型社会のところで、有機肥料で農業ができていく地域、というのは偏った見方だと感じる。数十年後の農地環境に配慮した農業ができ、収益が成り立っている地域などがよいのではないか。

提案のところにある、通貨がなくても暮らせる地域や物々交換で暮らしが成り立つ、というのは本質的ではないと感じる。むしろ、外貨や外資に依存しなくても地域で暮らしのベースが成り立つ地域、などの表現がよい。

フードロスをなくすという部分についても、地産地消で循環する、というような意味合いで書くのがよいのではないか。

〔委員〕

公務員が生き生きとチャレンジできる地域になればよい。これからはソーシャルな部分が求められる時代になる。オフィシャルに支える部分というのがとても大きくなっていくので、人材が減る中で、公務員の働き方も含めて効率化していかないといけない。企業と公務員の連携や交流も、もっと流動的にならないといけない。

[委員]

昼間は公務員でも夜は住民というような目線で、活動や提案をするというような二面性をもってもらいたいと感じている。

[委員]

今日の話を変えて考えると、32年前の丹波の森宣言はビジョンである。そのビジョンに合わせて色々な計画を作っていこうとしてきた。ポスト30年について議論した内容については、事務局から早急に委員の皆さんに共有してほしい。

我々が今作っているビジョンは、丹波の森宣言の次のバージョンを作ろうとしているのだ、という意識をしたほうがよいと思う。

[委員]

循環型社会のところで、これから丹波地域が生き残ることを考えると、地域内の循環という考え方だけではいけない。人口が減っていく地域においては、そのような考え方では破滅につながる。世界の中で、丹波でしか果たせない役割を果たす。役割分担の中で重要な地位にいる、という考え方に変える必要がある。

[委員]

私がネットワークや国際化について発言したのも、まさにそのような意味である。循環ということばをもっと冷静に考える。いい加減に使ってはいけない。その意味するところをしっかりと捉える必要がある。

## 6 閉 会